

# 『蜻蛉日記』上巻の「返し、いと古めきたり」考

## ―道綱母と兼家の贈答歌の問題を中心に―

堤 和博

はじめに

誰も濡るらむ(20・道綱母)

『蜻蛉日記』上巻は、冒頭序文に続いて兼家からの求婚の顛末が記された後、兼家と道綱母の和歌を中心に叙述が進む。新枕の後朝の贈答歌、結婚成立の後朝の贈答歌も含んで、さらに叙述は和歌中心に進むが、陸奥国に出生する父倫寧との別れを描く場面になると、一転して散文中心に描かれる。そしてまた和歌中心の叙述に戻る。

このような私家集的な叙述の中で、散文中心の父との別れの場面に転じる直前には、次の贈答歌がある。

かくて十月になりぬ。ここに物忌なるほどを、心もとなげにいひつつ、

嘆きつゝ返すころもの露けきにとゞ空さへしぐれ

そふらむ(19・兼家)

返し、いと古めきたり。

思ひあらばひなましものをいかでかは返すころもの

本稿で問題にしたいのは、波線部の一節(以下、論述の便宜上「自己卑下」と呼ぶ)である。なぜ20番歌にこのような評言を付すのか。この前後を見ても、また、『蜻蛉日記』全体を見渡しても、道綱母自作の和歌にこのような評言を付す例は見当たらないのである。

この問題に関しては、20番歌が陳腐な詠みぶりになっているのを卑下したものだとして解する古く「解環」に源を發する考えが受け継がれ、「思ひ」に「火」を掛ける趣向が具体的な陳腐な点として指摘されるのが一般である。また、「兼家の「かへす衣」をそのまま受け、古来夢の呪力とされてきたところを取りあげて、歌を仕立てた」(新編全集)点が指摘されるのも、下巻九七二年八月に見える「古めかし」という形容詞との関連を見据えると、妥当性があると思う。さらに、兼家の歌人としての力量を評価する山口博氏が、「兼家の歌の着想の良さは、「空さへ時雨そふらん」と、十月という季節

感を生かした所にあつた筈である」(傍点は原文)のに、20番の道綱母の歌からは季節感が消えているのを重視し、「兼家の歌と比較しての劣等感」が「自己卑下」を書かせたと想定するのは鋭い指摘であろう。

一方で、「初句が有名な古歌「思ひあらばむぐらの宿にねもしなむ」(伊勢物語・三段)に抛るゆえか」(新大系・括弧内原文)とも想定されているが、両歌の意味のつながりの薄さからすると、これには無理があるであろう。

そんな中、「注解五」は、「自己卑下」が『蜻蛉日記』の執筆時点で加えられた評言であるのを重視しながら、「本当に表現したい自らの心の真実」を当の和歌では表現できていなかったと道綱母が再認識したことの表れであるとの見解を出した。

「注解五」の見解に刺激されたのか、「よりすぐれた歌を詠むことを常に心がけるがゆえに、読者に見せた恥らいであろう。」(全注釈)、「その常套的な陳腐な着想では、作者の独自の心情が、けつして十分には表現できなかったという、『蜻蛉日記』執筆時の批評的なことば」(全集、「新全集」もほぼ同じ)、「この歌を詠んだ当時から十余年の辛酸を経た、日記執筆時の心境に立った回想的批評」(集成)との批評が出されている。

また、「全集」は、この贈答歌に至るまでの『蜻蛉日記』中の和歌にも注目し、「二人の幾組かの贈答歌に同じ手法がくりかえされてきたこともあらずかつて、「相も変わらぬ返歌

だ」といったのであろう。」との評も加えている。

「集成」の見解には後に触れる機会があるが、「新大系」を除けばどれも一理あると思いはするものの、20番歌一首に對してのみこのような「自己卑下」が加えられた理由の説明としては、やはり弱いように思えてならない。よって、「古めく」の意味からしても、これらすべての指摘を総合したところに道綱母の真意があつたという結論でよいとも思うのであるが、20番歌一首のみと言うか、ここでのみと言うか、とにかく「自己卑下」が『蜻蛉日記』中に一つだけある理由の説明を、私なりに気になる観点から試みるのが本稿の目的である。

### 一

最初に、20番歌の意味から考えておきたい。解が定まらなからである。

第三句以下は、「裏返したお互いの衣がどうして濡れるのでしょう」ととるのが最も自然だが、そうすると、兼家の衣については、「思ひ」という火があるのなら乾くであろうに、返した衣がどうして濡れているのでしょうか、思火がないからではないですか」と言っていると解しても、道綱母自身の衣が濡れていることをどう捉えているのか分かり難い。

そこで「誰も」に注目して幾つも論が出された。

古く「解環」は「たれも」を「それも」と校訂したが根拠

はなく、今は否定されたとしてよかろう。また、「誰も」を「誰でも」ととる「大系」等の解釈も、この贈答歌は二人の關係に絞って詠われているはずだから無理であろう。

さらに、「注解五」に、「誰も」は二人称の代用として兼家を指すとする説がある。すなわち、「注解五」は、「中巻高明左遷の条の「悲しと思ひいりしも、たれならねば記しおくなり」の場合、高明を指して「他ならぬあの人のことだから」の意とする説をとりたいのであるが、両者の「たれ」の用法に、おそらく共通するところがありそうに思われる。」（傍点は原文）と説明するが、無理があると思う。高明左遷の条の解釈は木村正中氏の考えに依っているらしいが、その高明左遷の条を取り上げる「注解三十五」になると木村説を撤回し、「他ならぬ私なのであるから」という通説で訳している。また、「注解五」でも続けて、「なおこのような二人称を「たれ」で表わす言い方は、いささか皮肉な表現と見られ、それをここで認めてよいかどうか疑問が残り……」と述べている。よって、「誰も」が兼家を指す説も否定してよかろうと考える。

そうすると、「誰も」は「二人とも」ととるしかなく、問題はもとに戻ってしまう。

そこで「全注釈」は観点を換え、「疑いは、「思ひ」の「火」でかわかぬことにかかっているのではなく、その一つ前の段階の、ぬれたことにかかっている」（追記）との説明を付加して口語訳する。しかし、道綱母の真意がこうだとするとかな

り苦しい歌で、兼家に真意が伝わったかどうか疑問だ。「全注釈」も続けて「したがって、初二句と第三句以下とで、意味のつながりが少し割れている。」と指摘する。そもそもこの解は、「作者は兼家の言い分が真に受けかねるふりをして、じらしている。この勝負は、「いと古めきたり」と言いながらも、きれいに一本取った。」（余説）と評しているところからして、二人の歌合戦では道綱母が「きれいに一本取」るはずだという先入観からきているように思える。これでは「自己卑下」を加える必要性がますます分からなくなり、実は後に述べる私説とは鋭く対立する。やはり、疑いは衣が乾かないところにかかるといふ自然な見方でまずは考えるべきであろう。<sup>(7)</sup>

そう考えると、例えば「全集」が、

二人の衣が濡れるのは、結局それを乾かす兼家の「思ひ」  
（愛情）の「ひ」（火）がないからだ（傍点及び括弧内  
原文）

と解しているのが、最も素直であろう。ただ、これだと、兼家の「思火」があれば兼家の衣も自分の衣も乾くはずだと言っていることになり、その点やや引っかけかりはするのであるが、どうか。

また「集成」は、

私の衣は、「思ひ（火）」を凌ぐ切ない涙のゆえですが、  
あなたのそれは、私に対する「思ひ（火）」など持ち合  
せていらつしやらないからでしょう。（括弧内原文）

とする。これでは、兼家の「思火」を否定しつつ、自分には「思火」があるが、それでも乾ききれないほどの涙を流しているのだと訴えていることになる。これでも、「心余りて」の歌だという印象は残る。

また、「新編全集」は「わたしの衣が涙に濡れるのは当然だとしても、兼家の衣が濡れるのは……」と解し、「新大系」は「……（私の衣はともかく）なぜあなたの返す衣が濡れているのか。」（括弧内原文）と解している。ともに、自分の衣が濡れているのは当然だとして、兼家の衣が濡れている理由だけを問題にしているのととっているようだ。

しかし、上の句からのつながりを考えると、両者の衣が濡れている理由を問題にしているのとるのが自然で、もし道綱母の真意が「新編全集」や「新大系」の解するようなものであったら、無理を感じさせる和歌ということになる。

結局、「全集」乃至「集成」の線で考えていくしかないであろうと思うが、道綱母の真意は正確には掴みかねる。ここでは、結論は保留しておきたい。

それで、今は本稿の後の考察とも拘わるところで、確実と思われる点だけをおさえておく。

19番歌から確認すると、兼家は上の句で次の二点を訴えている。下の句の内容は道綱母の返歌とは拘わらないので、この際おく。

① ……〈嘆きながら衣を返した〉

② ……〈衣が涙で濡れた〉

対して20番歌で道綱母は、今確認した「誰も」の解釈からして①②ともに認めた上で①②を訴え、③を加えていることになる。

① ……〈自分も衣を返した〉

② ……〈自分の衣も涙で濡れた〉

③ ……〈「思火」があれば衣は乾くはずなのに、二人の衣とも濡れたままなのはなぜか〉

そして、③で呈した衣が乾かないことに対する疑問について、兼家の衣に関しては〈実はあなたに「思火」などないだろう〉と皮肉を込めながら言外で詰っているかと解せるが、自分の衣に関してはどう捉えているのか明確ではない。

なお、「新編全集」や「新大系」の解では③の後半が、

③ ……〈二人の衣とも濡れたままだが、〈自分の衣は

当然として〉あなたの衣が濡れたままなのはなぜか〉となるが、たとえこうだとしても、後の私の論考には支障はないものと考える。

## 二

恋の贈答歌における女の返歌は男からの贈歌の切り返しになっているのが常套で、「全注釈」の言葉で言えば「きれいに一本取」ることを目指すとすれば、20番歌をこう捉えると、③で呈した疑問に対する兼家の衣についての答えは切り返しと言えるが、①②を認めてしまうのは切り返しになっていな

いのではないか。(そこで「全注釈」などの解釈が出てくるわけだが、それが無理なのは前述の通りである。)また、①②を言うのも、切り返しとしては緩いのではないか。そんなところを、新枕の前に見られた兼家からの贈歌に答えた道綱母の返歌との比較でみてみることにする。

秋つ方になりにけり。添へたる文に、「心さかしらづいたるやうに見えつる憂さになむ、念じつれど、いかなるにかあらむ、

鹿のねも聞えぬ里に住みながらあやしくあはぬ目を  
も見るかな」(7・兼家)

とある返りごと、

「高砂の峰の上わたりに住まふともしかさめぬべき

目とは聞かぬを」(8・道綱母)

げにあやしのことや」とばかりなむ。

兼家が言わんとするのは、牡鹿の鳴き声が聞こえてくる所でもないのに眠れないのは、あなたに相手にされないからだということだが、道綱母はそれに対して、兼家が現状で眠れないと言っているのを否定するにとどまらず、鹿がたくさんいる高砂に住まいしていてもあなたは眠れるはずと切り返している。

引き続き贈答歌が成立する記事がある。

又、程経て、

逢坂の関やなかなか近けれど越えわびぬれば嘆きて  
ぞ経る(9・兼家)

返し、

越えわぶる逢坂よりも音に聞く勿来をかたき関と知  
らなむ(10・道綱母)  
などいふ。

この贈答歌では、兼家が逢坂の関を越えられない、つまり、あなたと逢えないのは辛いと言うのに対し、道綱母が逢坂よりも勿来を固き関と知って欲しいと言うのは、逢えないどころか、来るなど言いたいのですという切り返しである。兼家が言う逢うよりも前段階の来るを拒否している。しかも、兼家が逢坂の関は「近けれど」と言って二人が逢うのは間近であるはずなのを示唆するのに対しても、勿来の関が「音に聞く」ものであることを言って、来ることすらも遙か遠い先だと切り返している。関の名前の字面の面だけでなく、位置の遠近も見事に取り込みながらの切り返しになっているのである。

これらに比べると、20番歌で①②を認めてしまい、さらに①②まで言うのが、いかに切り返しとして緩いかが分かると思う。

この20番歌の切り返しの緩さは、実は森田兼吉<sup>(10)</sup>氏が既に指摘している。

「思ひあらば」の歌で印象的なのは、その素直な詠み口と、そこに漂う甘さである。(中略)(兼家の歌は)新婚の夫の甘いささやきだが、どこまで真実かはむろん保証の限りではない。その意味では女の側から切り返しやすい歌なのだが、このとき道綱の母はそうはしなかった。「思ひあらば干なましものを」という上の二句は、「漏れてるなどというところを見ると、あなたに思いの火が本当にあるの? 変ねえ」という切り返しを予想させるのだが、意外にも「いかでかはかへす衣のたれも濡らむ」という形で歌は終息する。「たれも」とある以上、道綱の母も兼家に夢で逢いたくて衣を裏返して寝たというのであり、その衣が兼家恋しさの涙に濡れたのである。「あなたにもわたくしにも、思いの火は燃えさかっているはずなのに、どうしてなのかしら?」と、妻も甘くささやき返しているのである。兼家の自分への愛を自分の愛情と同等に評価し、肯定しているところに、この歌の特色がある。複雑な胸中を精一杯表現しようとして尽くせなかった、という気配のまったく感じられない歌のよりに私には思える。(傍線・二重線及び括弧内引用者)

先程検討した③での疑問と道綱母自身の衣が濡れていることとの関連を森田氏がどう捉えているのかは明確でないようなのだが、いずれにせよ、二重線部などからすると、氏も切り返しの緩さを指摘していると言える。その上で森田氏が主眼を置くのは、主として傍線部に示されているように、20番歌

の内容の甘さの方であろう。そして、この内容の甘さが、『蜻蛉日記』執筆時に問題の「自己卑下」を書かせたと解している。

対して私は、傍線部より二重線部の指摘の方に重きを置き、20番歌が19番歌の返歌として、切り返しが緩くなってしまっている点を、「自己卑下」が書かれた理由として捉えたいのである。

### 三

さて、私の考えを補強するため、あるいは森田説を補強することになるかもしれないが、『蜻蛉日記』に載るここまでの道綱母と兼家の和歌をお読みしていきたい。

まず、夏に兼家から求婚の和歌(1番)が届き、それには母親の勧めもあつて道綱母は返歌(2番)をする。(12番の贈答歌については、後にまた検討する。)が、以降兼家から贈られてくる四首の和歌(3〜6番)に対しては、侍女の代作・代筆で済ましている。

ところが、秋になると突然道綱母が返歌を返す。それが先程引用した78番の贈答歌である。兼家の手紙の文面を見ると、道綱母はこれまで同様賢こぶった様子で兼家の歌には返歌を寄越さなかったものと思える。

ではなぜここで突然道綱母は返歌する気になったのか。それは、『蜻蛉日記』のこのあたりを読む限りにおいては突然

の心境の変化に思えるだけであって、実際は、夏から秋にかけて道綱母は徐々に兼家にひかれていき、結婚の申し出を受け入れてもよいと思うようになっていたためと考えられる。要は、秋になるまでの時間経過の中で、道綱母が兼家に靡きつつあったというような心境の変化の機微は、私家集的と言われる『蜻蛉日記』上巻のこのあたりでは明示されない点に注意すべきである。

道綱母が兼家に靡きつつあることは、引き続き贈答歌が成立していることにも表れている。それがこれも先程引用した910番の贈答歌である。そして、新枕の後朝(1112番)と結婚成立時の後朝(1314番)の贈答歌が、この贈答歌に続くのである。<sup>1,2)</sup>

それが一転、一端結婚が成立すると、兼家から手紙がきても和歌を伴わなくなる。しかし、道綱母の方はそれにも和歌で答え続けるのである。

一々追つていくと、まず道綱母が「しばし旅なる所にある」時、兼家はわざわざそこまで会いに来て翌朝手紙を寄越すが和歌はない。しかし、道綱母は「たゞ」といって、次の和歌で返事する。

思ほえぬ垣ほにをればなでしこの花にぞ露はたまらざりける(15・道綱母)

15番歌に続けては、「などいふほどに、九月になりぬ。」

と書いてあるだけなので、兼家の返歌はなかったとみてよいだろう。返歌がなかったことに対しては勿論、そもそも贈歌がなかったことに対しても不満があったような書きぶりだと感じられる。それは、この次の記事の内容とも相俟つてのことである。

次は、九月になって兼家から手紙だけがくるのだが、やはり返事は和歌でし、この度は兼家から返歌がある。

つごもりがたに、しきりて二夜ばかり見えぬほど、<sup>文</sup>ばかりある返りごとに、

消えかへり露もまだひぬ袖のうへにけさはしぐるゝ空もわりなし(16・道綱母)

たちかへり、返りごと、

思ひやる心の空になりぬればけさはしぐると見ゆるなるらむ(17・兼家)

とて、返りごと書きあへぬほどに、見えたり。

道綱母の気持ちや付度すると、まず、波線部の書きざまから、兼家の手紙に和歌が添えられていないことに対する不満がはつきりと読み取れるのではないか。また、兼家の返歌についても、15番歌の時のように返歌がないよりはましだろうが、この返歌は、道綱母の歌同様時雨で仕立てて答えながら、他に技巧も特になく大雑把な詠歌のように思える。「注解四」が、

兼家の歌は、作者の歌の切実なうつつたえに對して大まかな応答となつているところに、両者の微妙な心のへだたりを読みとるべきであろうと評しているの思い起こされるのである。道綱母の満足度は低かったに違いない。

17番歌に対しても道綱母は返歌をしようとしたが、兼家が自ら訪れて和歌の遣り取りが続かなかつたことも最後に記されている。これに関しても、兼家が来てくれたことは嬉しかつただろうが、和歌の遣り取りが中断してしまつたことを残念に思う気持ちも同時にあつたであろう。

さらに続きをみてみよう。

又、程経て、見え怠るほど、雨など降りたる日、「暮に來む」などやありけむ、

柏木の森の下草くれごとになほ頼めとや漏るを見る  
見る(18・道綱母)

返りごとは、みづから来て、紛らはしつ。

やはり手紙だけが兼家から届き、道綱母は和歌を返している。そして、「返りごとは、みづから来て、紛らはしつ。」というから、結果的には17番歌の時と同じようになる。

この18番歌について「全注釈」は、

第三・四句により、兼家は来訪を予告しながら、そのとおり実行しなかつたことが何度かあつたとわかる。

と指摘する。さらに「集成」は、

「なほたのめとや」には、強く相手に反問し積明を求める語勢がある。さればこそ兼家は、返歌にも及ばず、みづから訪れて紛らわしたものである(傍点は原文、波線は引用者)

と指摘する。この二つの指摘を繋げると、道綱母は兼家が来訪の約束を破つた「積明を求め」たことになるが、ならばそれは当然和歌による積明だと考えられるであろう。ここではその点が肝腎であり、そうすると、この場面からも、兼家の来訪を嬉しく思いながらも、贈答歌として続いていかなかつたことを不満に思う道綱母の気持ちを読み取れるのである。

ところでこの場合、「返りごと」を「紛らは」すつもりが果たして兼家にあつたのだろうか。兼家にすれば、和歌を贈答するより自ら行く方が道綱母を喜ばすことになると思つていたかもしれない。いずれにせよ、道綱母には兼家の態度が「紛らはしつ」と見えたのだから、それだけ和歌を重視していたと分かるというものである。

さて、ここまでみると、道綱母は、和歌で気持ちを遣り取りすることで愛情の確認をしようと思つておられる。それも理想は兼家からの贈歌による贈答歌ではないか。それが叶わない時には自分から贈歌して贈答歌になることを望んでいるようである。そうすると、篠塚純子氏が『蜻蛉日記』のこのあたりの記述を点検し、

彼女が夫との心のつながりを、束の間であつたにせよ鮮



明に確かめ得るのは、和歌の贈答であった

と想定しているのが強く思い起こされてくるのである。しかし、いずれにしても結婚後は贈答歌は成り立たず、道綱母の不満感がつのつていくばかりなのが見て取れる。

そして時は十月になり、叙述は本稿で問題とする19・20番の贈答歌に移る。確認してきて分かる通り、『蜻蛉日記』を見る限り、ここで結婚以降初めて兼家から和歌が贈られてきたのである。

その時道綱母はどう思ったかと考えると、このたまさかに贈られてきた兼家の歌に対し、やはり兼家の歌の題材や修辞を踏襲しながら切れ味鋭く切り返さなくてはと思ったに違ひなからう。先に新枕前の贈答歌を取り上げたが、その際は、道綱母の気持ちは兼家に靡きつつあったにも拘わらず、鹿を主題にした贈答歌（7・8番）でも、関を主題にした贈答歌（9・10番）でも、兼家の愛情・求愛を鋭く否定・拒絶する内容を返している。言うまでもなく、それが男女間の贈答歌の常套であったわけで、19番歌に対しても8番歌・10番歌と同様あるいは同等以上の切り返しの秀歌を返す必要を感じたと思うのである。

ところで、返歌で鋭く切り返すことは、道綱母にとって、実は常套以上の意味をもっていったと思うのである。そのことを確認するために、兼家からの求婚最初の贈答歌（1・2番）、すなわち道綱母が兼家にまだ愛情を感じていなかったであろう頃に交わされた贈答歌を引いて、新枕も間近で、道綱母も

兼家に愛情を感じ始めていたであろう頃に交わされた7・10番の二組の贈答歌と比較しておきたい。

音にのみ聞けば悲しなほとゝぎすこと語らはむと思ふこゝろあり（1・兼家）

語らはむ人なき里にほとゝぎすかひなかるべき声な古しそ（2・道綱母）

兼家の歌が道綱母を郭公に喩えて逢って語らおうという気持ちがあると訴えるのに対し、道綱母の切り返しは、あなたが語り合う相手はいない里で無駄な鳴き声を上げるなというにとどまっている。道綱母の歌は兼家の歌に対して、「効」と「卵」の掛詞などは目立つかもしれないが、切り返しとしては誠に単純だと言え、先に吟味した8番歌や10番歌のような鋭さは全くない。

このように、愛情を感じ始めていた頃の方がそうでない頃よりも切り返しが鋭いのが分かりおもしろい。では、なぜこのようなことになるのかというと、それは、道綱母にとって、返歌で鋭く切り返すことが愛情を確認することとつながっていたからだと思うのである。

そこで問題を20番歌に戻すと、先程も述べたように、この久々の兼家からの贈答歌に対して道綱母は鋭く切り返さなくてはと思ったであろうが、それは愛情確認の意味も込めてであったのである。ところが、結果は切り返しとしては誠に緩い

ものに終わり、ただ陳腐な掛詞などが目立ってしまった。ここに私は、問題の「自己卑下」が付される理由をみるのである。

つまり、先程引いた篠塚純子氏の指摘に付け加えるに、「夫との心のつながりを……確かめ得る」には、贈答歌の答歌で鋭く切り返す必要があり、それを20番歌で成し得なかったことから「自己卑下」が出たものと考えるのである。

#### 四

以上は、森田兼吉氏の論や篠塚氏の指摘にも導かれながら、問題の贈答歌がなされた当時、あるいはなされるまでの道綱母にとって、和歌、特に贈答歌がどのような役割を果たしていたか、どういう意味をもっていたかということを視野に入れ、「自己卑下」が出てくる理由を探ってみた。さらに私の考えを補強するために、今度は、この後の叙述も和歌に焦点を当てながら暫く追ってみたいと思う。この後の叙述からも、「自己卑下」が出てくる前提となっている、あるいは背景となっている、和歌の贈答によって兼家との愛情を確かめようとする道綱母の姿勢がうかがえると考えるからである。

問題の贈答歌直後には散文中心の父との別れの叙述があり、それに十二月の叙述が続くのだが、十二月は次の一挿話のみが記される。

十二月になりぬ。横川に、物することありて、のぼりぬる人、「雪に降りこめられて、いとあはれに恋しきこと多くなむ」とあるにつけて、

こほるらむ横川の水に降る雪もわがごと消えて物は思はじ(23・道綱母)

などいひて、その年はかなく暮れぬ。

兼家から和歌のない手紙がきて、それに道綱母が和歌で答える形に完全に戻っている。

ところで、『蜻蛉日記』には記述されないが、兼家が横川に登ったのは、諸注に指摘のある通り、父師輔に従つてのとて五日であったと、『扶桑略記』の記事から類推される。そこで兼家が雪に降り込められて、右大臣である師輔諸共に年末まで下山できないとなると大事だが、そんなことはどの記録類からもうかがえない。よって、兼家も中旬頃には帰宅していたと思われる。ならば、兼家は年末までには何度か道綱母の所を訪れたに違いないのだが、23番歌に続けて「などいひて、その年はかなく暮れぬ。」と云うのである。まるで、兼家はそのまま年末まで道綱母の所に音沙汰がなかったような書きざまだが、横川から兼家が和歌を贈つてこなかったことに対する道綱母の不満が、このような叙述を生んだのではないか。また想像するに、23番歌に対する兼家からの返歌がなかったことに対する不満も、この記述と関連するのではないか。横川での状況を考えると間髪を入れずの贈答は無理で

も、下山後に和歌を期待していて裏切られたのではないだろうか。

年が明けた次の叙述もみておこう。

正月ばかりに、「二三日見えぬほどに、物へわたらむとて、  
「人こぼ、取らせよ」とて、書き置きたる、

知られねば身をうぐひすのふりいでつゝなきてこそ

ゆけ野にも山にも(24・道綱母)

返りごとあり。

うぐひすのあだにもゆかむ山べにも鳴く声聞かば尋

ぬばかりぞ(25・兼家)

兼家が「二三日見えぬ」間、道綱母は兼家の訪れを期待するとともに、訪れがないのなら和歌が贈られてくることを期待していただろうと想像するのだが、その前に自身が外出する用事ができてしまった。このように自身行動を起こす場合には、和歌を詠み贈っている<sup>16</sup>のである。

もう少し続きを追っていきたいが、有名な場面が続くのであるべく簡単に触れておく。

春夏の妊娠中から八月末近くの出産についての簡単な叙述を挟み、九月になって、兼家が新しい女に出す懸想文を偶然発見する場面にいよいよなる。道綱母は次の和歌をその懸想文に書き付けるが、兼家の反応は書かれていない。無視されたのであろうか。

疑はしほかにわたせるふみ見ればここやとだえにならむ  
とすらむ(26・道綱母)

この直後の記述では、その女と兼家との結婚が成立したと思われることを次のように記している。

など思ふほどに、むべなう、十月つごもりがたに、三夜  
しきりて、見えぬ時あり。つれなうて、「しばしこゝろ  
みるほどに」など、けしきあり。

ここでは和歌を詠もうともしていないようだ。兼家と新しい女との関係発覚時には26番歌を詠んで兼家に贈っていたものを、さらに事態が悪化して結婚が成立すると詠もうとさえしない点に注意しておきたい。

次に、兼家の新しい女は町の小路に住まいすると突き止めた後、やって来た兼家に門前払いを食らわし、『百人一首』にも採られた次の和歌を贈り、それには兼家から返歌があった。

嘆きつゝ独り寝る夜のおくるまはいかに久しきものとか  
は知る(27・道綱母)  
げにやげに冬の夜ならぬ真木の戸も遅くおくるはわびし  
かりけり(28・兼家)

兼家から返歌はあったものの、この歌は特に初句の口語的な言い回しが問題で、「全集」・「新編全集」によって、

作者がせめて切ない胸中を訴えようと詠んだ和歌さえも、兼家によってはぐらかされてしまう応酬のむなしさ。

が指摘されている通り、道綱母の気持ちを和らげるものではなかったと考えられる。

それで、この後の叙述ももう少し追いたい気もするのだが、あまりに対象を拡張すぎても論点がぼやけるので一旦おき、纏めておきたい。

問題の1920番の贈答歌の後でも、兼家からの和歌のない場合にも和歌で答えたり、あるいは、道綱母の方から贈歌する場合はかなりなのが確認できる。よって、和歌で兼家との愛情を確かめようとする道綱母の姿勢は変わらないと言えるが、兼家から返歌があった時も含めて、愛情の確認には成功していないのが見て取れる。しかも、このあたりでは、不満足感が以前にも増して強まっているのではないかと思われる場合が目立ってくる。中でも、26番歌では強い不安感を、27番歌では抗議の気持ちを訴えなければならなかったし、26番歌の直後の記事では和歌さえも詠めなくなっているのがあった。

さて、「自己卑下」は、当時から抱いていた忸怩たる思いだと思ふのだが、「注解五」以来重視されているように、書き付けたのは勿論『蜻蛉日記』執筆時である。ならば、「自己卑下」を書き付ける時、この後の十二月の顛末も、正月の贈答歌の経緯も、はたまた約一年後に町の小路の女が出現し

た時のことも、頭を過ぎったはずである。つまり、問題の1920番の贈答歌は、兼家の方からは和歌がなく、自分から詠み掛けなくてはならなかった状況が続く真つ直中で、兼家の方から贈られてきた数少ない贈歌とその返歌<sup>17</sup>だったのである。

## 五

これまで確認してきた通り、結婚成立後は道綱母からの贈歌が多くなっているわけだが、その件に因み、「女からの贈歌」に関する鈴木一雄氏の論をここでみておきたい。<sup>18</sup>

鈴木氏は、『源氏物語』と『和泉式部日記』を対象にして、「女から贈歌する場合があるとすれば、そこには、その女性にとって特別な感情、意志、要求が働いていることを検証」し、

そこには女の積極的な働きかけが看取され、女のあせり、歎き、訴え、渴きなどの強調がうかがわれるのである。しかも、女から贈歌するにいたるきつかけは、つねに男との仲の危機あるいは悪化である。たとい前後に二人の危機が記されていない場合にも、女から贈歌すること自体が、そのときの二人の関係の危機を暗示するほどに、

この逆型贈答歌は敏感に女の内面を反映する。と結論する。さらにこのことは、27番歌についても「適用できるのではなからうか」とするが、その前の26番歌にも適用できるであろう。

鈴木氏の論を踏まえて結婚成立後の道綱母の歌をみると、それらは「女から贈歌する場合」ではあるが、兼家から贈歌があつてもよさそうな時に手紙しかなく、それに和歌で答えているという場合が多く、鈴木氏が検討対象とした事例（男からの贈歌が特に求められているのではない場合で、『蜻蛉日記』ならまさしく26番歌や27番歌が詠まれたような場合。また、正月の24番歌を贈った場合も当て嵌まるであろう）とは事情が異なるが、やはり道綱母の「あせり、歎き、訴え、渴き」、あるいは不安などが読み取れると思う。当然だが、贈歌に返歌する時の返歌の内容とは違っているのであり、「解釈大成」が15〜20番歌迄を含む本文を取り上げた鑑賞・解説欄で、

このあたり、求婚時代と違って、文はよこしても歌を詠む努力を怠っている兼家であり、作者の歌の方が多くかつ、先に贈られている。しかも求婚時代の返歌のように彼女の歌には高姿勢や高飛車な皮肉、からかう詠み口はまったく影をひそめて、いつも孤閨のやるせなさ、愛情不足の訴えに終始している。

と指摘しているのも、もう少し後まで当て嵌まると思うのである。

そこで、「四」までで確認した状況に鈴木氏や「解釈大成」の指摘を加味して、私の主張したいところを纏め直すと次のようになる。

結婚後自分から贈歌しなくてはならなくなった道綱母は

「あせり、歎き、訴え、渴き」や不安を和歌で訴えるのであった。町の小路の女が出現してからも、まさしく「男との仲の危機あるいは悪化」に直面して自分から兼家に贈歌した。兼家からは返歌のない時もあり、あつても満足できないことが多かった。そんなことが続く真つ直中で、たまさかに兼家から和歌が贈られてきてそれに答えたのが問題の19番の贈答歌であり、ここで道綱母は鋭く切り返して愛情の確認をしたかったに違いない。だが、結婚前の鹿や関を主題にした和歌（8番歌・10番歌）のようにには鋭く切り返せず、愛情の確認にも至らなかつた。それで執筆時に「自己卑下」が甦り、それを書き加える結果になったのである。

というように考えてくると、先に示した「集成」が「この歌を詠んだ当時から十余年の辛酸を経た……」と「自己卑下」に関連して評しているのについては、確かにこの「自己卑下」には「十余年の辛酸」も込められているかもしれないのだが、直近の気持ちの方が何より強く甦ったものと考えるのである。

## 六

さて、先程の兼家の28番の「げにやげに……」歌の続きから、『蜻蛉日記』の叙述を和歌中心に追う作業を再開し、さらに私論の補強に努めたい。

28番歌を返されたことも含め、ここに至るまでの経緯を勘

案すると、さすがの道綱母も、兼家に和歌を贈る気力をなくす方向に向かうのではないかと思えてくる。つまり、先の鈴木一雄氏の言うところの、「あせり、歎き、訴え、渴き」はまたた不安を和歌で訴える気も萎えていくのではないかと想像されるのである。そう思つて続きを見ていくと、実は内心では兼家に和歌を贈りたく思つているようのだが、素直にそうしようとはしない道綱母の様子や、また、先の兼家と町の小路の女との結婚が成立したと分かった時にも既にみえていたように、和歌を詠むことさえできない姿が描かれているのである。

28番歌の直後には、早速次のような叙述がある。和歌は詠もうともしていかないようなのである。

さても、いとあやしかりつるほどに、事なしびたり。し  
ばしは、忍びたるさまに、「内裏に」など言ひつゝぞあ  
るべきを。いとゞしう心づきなく思ふことぞ、限りなき  
や。

波線部で道綱母は兼家の見え透いた嘘を求めているのだが、ここから、『一条撰政御集』66番に載る兼家の兄伊尹と北の方恵子女王をめぐる歌語り（あるいは、それに類する歌語り）を思い浮かべつつ、自身では和歌を詠めなくなった道綱母の姿が読み取れるのではないかと先の拙稿で考察した<sup>19)</sup>。

この後続く翌年の桃の節句の翌日には、道綱母が最初に詠

歌して兼家との贈答歌が成り立っている。

……心たゞにしもあらで、手習ひにしたり。

待つほどのきのふすきにし花のえはけふ折ることぞ

かひなかりける（29・道綱母）

と書きて、よしや、憎きに、と思ひて、隠しつるけしき  
を見て、奪ひ取りて、返ししたり。

三千年を見つべきみには年ごとにすくにもあらぬ花  
と知らせむ（30・兼家）

贈答歌が成り立ってはいろのだが、道綱母が和歌を「手習ひにし」、「書きて……隠し」たのを、兼家が「奪ひ取りて、返ししたり」という経緯を経てである。引用を省略した姉の夫藤原為雅の歌（31番）などもあり、また、詳述は避けるが、道綱母の歌も「明るい媚態を感じさせる。」（集成）とも読み取られている明るい状況なので、（媚態が感じられるかどうかは別としても）道綱母はさすがに詠歌はしているものの、それを兼家に素直に見せようとしない点を重視したい。この態度から、まだ前年の気持ちを引きずっているであろうと受け取れるからである。

この明るい場面の直後は、町の小路の女の件を忘れて貰つては困るとばかりに次の記述がくる。

かくて、今はこの町の小路に、わざと色に出でにたり。

本つ人をだに、あやしう、悔しと思ひげなる時がちなり。  
いふかたなうこゝろ憂しと思へども、なにわざをかはせむ。

残念ながら傍線部のあたりに脱文や本文の乱れがあるらしく、全体の正確な意味はとれないが、脱文部に和歌がなかったとしたら、道綱母は町の小路の女に関して和歌を詠もうとはしていないことになる。傍線部の直後には、和歌に託してもよいと思われるような感懐が吐露されているにも拘わらずである。

ところがこの後、姉が夫の為雅に連れられて家を出る場面になると、姉に贈った和歌に為雅が答える形で為雅と贈答歌(32・33番)が成り立っている。道綱母の歌だけ引いておく。

なかかゝる嘆きは繁さまさりつゝ人のみかるゝ宿となる  
らむ(32・道綱母)

波線部は、兼家と町の小路の女の件に関する嘆きに姉との別れの嘆きが加わるといふ意味だと思われ、当然道綱母の夫婦生活上の悩みは解消されていないのだが、それを和歌にして兼家に訴えようとはしていないのに注意したい。

そして次には、よく取り上げられる時姫との贈答歌(34・35番)がくる。これも道綱母の歌だけ引いておく。

そこにさへかるといふなる真孤草いかなる沢にねをとどむらむ(34・道綱母)

道綱母の性格をめぐって云々されることの多い場面であるが、それよりここでもやはり、兼家には和歌を贈らないでいるのに、時姫には贈っている点を重視したい。

このようにみていると、和歌が詠めない時もあるが、特に32・34番歌から、自分の嘆きを和歌に託することは完全にはやめようとならないのが分かる。しかも両歌とも技巧を凝らした正統な和歌である。こんな歌を兼家以外の人には贈っていることと対照すれば、兼家に和歌を贈る気は萎えているのが、鮮明に浮かび上がってこよう。そして、まともに兼家に和歌を見せようとはしない29番歌での態度も勘案すると、32・34番歌などは、本当は兼家に歌をぶつきたい道綱母が、その代わりとして詠んでいるという感がしてこないであろうか。

こんなことが続いて、次に兼家と贈答歌が一応成り立つ(36〜38番歌)のは、七月になつてである。一応と言うのは、六月からの次のような経緯を経ているからである。

六月になりぬ。ついたちかけて長雨いたうす。見出だして、独りごとに、

わが宿の嘆きの下葉色深くうつろひにけりながめふるまに(36・道綱母)

などいふほどに、七月になりぬ。絶えぬと見ましかば、

仮に来るにはまさりなまし、など、思ひ続ける折に、ものしたる日あり。物もいはねば、さうぐしげなるに、前なる人、ありし下葉のことを、物のついでに、いひ出でたれば、聞きて、かくいふ。

折ならで色づきにけるもみぢばは時にあひてぞ色まさりける (37・兼家)

とあれば、硯引き寄せて、

あきにあふ色こそましてわびしけれ下葉をだにも嘆きしものを (38・道綱母)

とぞ書き付くる。

贈答歌の問題より前に、36番歌が道綱母の独詠歌である点に目を引かれる。これが『蜻蛉日記』の最初の独詠歌である。内容をみると、「わが宿の嘆き」と詠い出して兼家との仲を嘆きながら、その「嘆き」は我が身の容色の衰えに対するものに収斂していく。独詠歌らしく、一人しみじみと嘆かれるという気持ちが強く出た和歌となっているのである。

しかしそれにしてもこの独詠歌も、やはり心の底では兼家に対して和歌をぶつけたかと思っていながらも、その気力の萎えている時に、贈歌の代替のように詠まれたものと考えられるのではないだろうか。

兼家に対して和歌をぶつけたかと思っていたと想定するのは、波線部に見られる翌月の侍女の振る舞いからである。これは、道綱母の心底を読み取ったものだと思うのである。

しかし同時に、このように侍女が機転を働かせなくてはならなかったということからは、道綱母自ら兼家に歌を贈る気力は失せてしまっている様子も当然うかがえるのである。

いずれにせよ、この最初は独詠歌であったものが、侍女の機転によって贈答歌に発展する。道綱母は三首目も返しているが、「とぞ書き付くる。」と言うからには、兼家に差し出してはいないのだろう。38番歌もあくまでも独詠歌であることを貫こうとしているがごとくである。桃の節句の翌日同様、兼家に和歌を贈ろうとする積極性は引き続き示そうとはしないのが分かる。

39番の隣人の歌を挟み、次に道綱母が兼家に和歌を贈るのは、兼家から「帳の柱に結びつけたたりし小弓の矢取りて」という手紙がきた時である。

思ひ出づる時もあらじと思へどもやといふにこそ驚かれぬれ (40・道綱母)

この歌は『後拾遺和歌集』巻二十・雑六・誹諧歌・1215番に採られたものであり、これでは、和歌によって自分の思いを兼家に伝えようとする意識は薄いであろう。そういう意識が強ければ、誹諧歌に入れられる和歌ではなく、古今調の正当な和歌を詠み贈るだろうと思うからである。ちなみに、40番歌からいきなり次に引用する部分に続き、この歌に対する兼家の反応等は何も書かれていない。



かくて絶えたるほど、わが家は、内裏より参りまかづる道にしもあれば、夜中・暁と、うちしはぶきてうち渡るも、聞かじと思へども、うち解けたる寝も寝られず、夜長うして眠ることなれば、さななりと見聞く心ちは、何にかは似たる。

いまはいかで見聞かずだにありにしがなと思ふに、「昔すぎごとせし人も、今はおはせずとか」など、人につきて聞えごつを聞くを、ものしうのみおほゆれば、日暮れはかなしうのみおほゆ。

和歌を含まない部分を一続きに引用したが、ここは内容上は二つに分けられると思うので、段落分けしておいた。前半は、知られている通り、波線部の「上陽白髪人」の引用に切々たる思いが込められている。後半は、兼家との不仲を聞きつけたかつての求婚者がまた求婚してきたことを言っていると思うのだが、とにかく、波線部で悲しみが吐露されている。しかし、いずれにおいても和歌を詠もうとはしていないのである。

そして、再び時姫との贈答歌（4142番）を挟み、次の叙述が来る。

かくて、常にしもえ否び果てで、時々見えて、冬にもなりぬ。臥し起きは、たゞ、をさなき人をもてあそびて、「いかにして綱代の氷魚にこと問はむ」とぞ、心にもあ

らで、うちいはるゝ。

この波線部は、普通は『蜻蛉日記』に見える最初の引歌表現だと捉えられているが、これは元の修理の和歌の詠歌事情をも踏まえた「引・歌語り表現」乃至は「引・歌物語表現」ともいうべきものだ。私は考えている。詳細は拙著<sup>(2)</sup>に譲るが、いずれにしても、道綱母は和歌を詠む気力をなくしているから、このような表現が出てくるのであると、ここでは主張しておきたい。

この後は翌年の春の叙述に移り、そこでは二人の間に贈答歌が復活している（43〜45番）。道綱母の気持ち落ち着きつつあることの表れだと思ふのだが、直後に町の小路の女の男児出産があつたりと状況は展開していく。そこまでいくと、1920番の贈答歌ともかなり遠くなるし、このあたりでおくことにする。

さて、道綱母は兼家に対して和歌を贈る気力をなくしてしまふのではないかと思つてみてきた。その結果、誹諧歌を詠み贈つたり、独詠歌が贈答歌に発展したりすることはあつても、まともに兼家に対して和歌をぶつける気力は萎えてしまつているのが確認できたと思う。時には和歌そのものを詠まない場合もみられた。その代わりに伊尹と北の方恵子女王の歌語りを享受したり、修理の歌語り・歌物語を享受したりする姿がみられたのである。また一方で、姉との別れに際して姉に和歌を贈つて結果として為雅との贈答歌が成立したり、

時姫に和歌を贈って贈答歌が成立したりして、和歌そのものを捨ててしまっているのでも勿論ないのも分かった。

このようなことを本節ではみてきたわけだが、それを本稿で問題とする「自己卑下」とも関連させて纏め直すと、次のようになる。

「自己卑下」が付された理由として、道綱母から兼家に和歌を贈らなければならなかった状況が主に続く中で、たまさかに贈られてきた兼家からの贈歌に対しての返歌の切り返し方が緩かったのを重視するわけだが、同時に、切り返しの緩さのせいもあって和歌でもって二人の愛情・紐帯を確認するには至らなかつたと道綱母は感じた。この忸怩たる思いは以後も尾を引いていき、兼家の行状・態度とも相俟って、兼家に贈歌する気をなくしていく様子、和歌そのものを詠む気さもなくしてしまう様子、あるいはその代わりに歌語りや歌物語に思いを馳せたりする様子、あるいは、兼家以外の人とならから和歌を贈答する様子などがうかがえるようになるのである。

### おわりに

以上、20番の道綱母の歌の前にある「返し、いと古めきたり」という評言が付された理由と、それに加えて当時の道綱母の心境を、和歌に焦点をあてて考察した。「六」ではその道綱母の心境がその後どうなっていたかについても考えて

みた。私の主張は、「二」「三」「五」「六」の末で段階を踏んで纏めておいた。

### 【注】

(1) 『蜻蛉日記』の本文引用は、角川日本古典文庫『蜻蛉日記』（柿本奨氏著、一九六七年一月）により、波線・鉤括弧等を私に付した所がある。和歌には歌番号と詠者を記す。以下、同じ。

(2) 本稿で引用・言及する『蜻蛉日記』の注釈のうち次のものは、それぞれ略称による。

「解環」——『かげろふの日記解環』（坂徹著、一七八五年刊）。

「大系」——日本古典文学大系20『土左日記かげろふ日記和泉式部日記更級日記』（『かげろふ日記』は川口久雄氏担当、一九五七年一二月・岩波書店）。

「注解四」「注解五」「注解三十五」——『蜻蛉日記注解』（秋山虔・上村悦子・木村正中氏、『国文学解釈と鑑賞』・至文堂）。

「注解四」——27巻9号・一九六二年八月。

「注解五」——27巻10号・一九六二年九月。

「注解三十五」——30巻3号・一九六五年三月。

「全注釈」——『蜻蛉日記全注釈上巻』（柿本奨氏著、一九六六年八月・角川書店）。

「全集」——日本古典文学全集9『土佐日記蜻蛉日記』（『蜻

『蜻蛉日記』は木村正中・伊牟田経久氏担当、一九七三年三月・小学館）。

「集成」—新潮日本古典集成『蜻蛉日記』（犬養廉氏著、一九八二年一〇月・新潮社）。

「解釈大成」—『蜻蛉日記解釈大成1』（上村悦子氏著、一九八三年一月・明治書院）。

「新大系」—新日本古典文学大系24『土佐日記蜻蛉日記紫式部日記更級日記』（『蜻蛉日記』は今西祐一郎氏担当、一九八九年一月・岩波書店）。

「編全集」—新編日本古典文学全集13『土佐日記蜻蛉日記』（『蜻蛉日記』は木村正中・伊牟田経久氏担当、一九九五年一〇月・小学館）。

(3) 高野晴代氏「ふるめく歌—『蜻蛉日記』執筆への一視点—」（上村悦子先生頌寿記念論集編集委員会・上村悦子氏編『王朝日記の新研究』一九九五年一〇月・笠間書院）参照。

(4) 『王朝歌壇の研究村上冷泉  
円融朝篇』（一九六七年一〇月・桜楓社）「前篇 撰関家の歌人と家集 第五章 歌人兼家と蜻蛉日記」。

(5) 注(3) 論文参照。

(6) 注(3) 論文参照。

(7) 高野晴代氏（注(3)に同じ）も、「全注釈」の「初二句と第三句以下とで、意味のつながりが少し割れてい

る」という見方を勘案して、第三句で示される疑問は兼家の衣が濡れたことにかかると解する口語訳を示している。ちなみに、高野氏の主張の眼目は、『万葉集』などから証歌を挙げつつ、この贈答歌で詠まれている俗信を「恋人の見る夢に現れるために、自分が衣を裏返す」とのみなすところにある。

(8) 20番歌の解は注釈書ごとに微妙に違うと言っているが、他にも例えば増田繁夫氏（全対訳日本古典新書『かげろふ日記』（一九七八年一二月・創英社））が、「もし、あなたの方に「思ひ」という「火」があったら、濡れた衣も乾くでしょうに、どうしてこんなに裏返した夜着がどちらも濡れているでしょうね。」と訳すのは、「新大系」・新編全集」かあるいは「全集」かどちらかと同じ主旨であろうが微妙である。また、同じ増田氏（日本の文学古典編8『蜻蛉日記』（一九八六年九月・ほるぷ出版））は、「「思ひ」という「火」があるなら、濡れた衣も乾くはずなのに、どうして返して着た衣がどちらも濡れるのでしょうか。あなたも私も愛情の火が足りないのですね」とも訳すのは、素直な解釈の一つだと思いが、これでは、後に問題にするように、贈歌に対する切り返しにほとんどなっていないことになる。ちなみにこの解は、後に取り上げる森田兼吉氏の解に通じるものである。

(9) 増田繁夫氏著、日本の作家9『蜻蛉日記作者右大将道綱母』(一九八三年四月・新典社) 参照。

(10) 『日記文学の成立と展開』(一九九六年二月・笠間書院)「第一部 古代の日記文学 第二章 『かげろふの日記』を読む 二 「返し、いと古めきたり」「例のつれなうなりぬ」。

(11) 注(7)で言及した高野氏も、「返歌は、一般的に、贈歌の主要語句を使用し、否定的に切り返す方法をとる。」と指摘し、氏自身の解釈による20番歌は、「思ひ」の「火」によるかわきは、下句につながりにくい表現となっている。それは決して巧みな返歌ではない」とし、その点を「自己卑下」が書かれた理由の一つとして問題視している。

(12) 本稿では、男女間の恋の贈答歌において、女の返歌が贈歌の切り返しになる点を重視しているが、それは新枕や結婚当初の贈答歌には当て嵌まらないのも常套的なことで、『蜻蛉日記』における11〜14番歌も同様である。よって、本稿では11〜14番歌について考察は加えていない。念のため申し添えておく。

(13) 『蜻蛉日記の心と表現』(一九九五年四月・勉誠社)。このあたりの叙述は、同著から多大な恩恵を得た。記して感謝する。

(14) 父との別れの場面では、道綱母は自分を慰めにかかる兼家を信用しようとはしない点に注意したい。例えば、

「人はまだ見馴るといふべきほどにもあらず、見ゆるごとくに、たゞさしぐめるにのみあり、いと心細く悲しきこと、物に似ず。見る人も、いとあはれに、忘るまじきまにのみ語らふめれど、人の心は、それに従ふべきかと思へば、たゞひとへに悲しう心細きことをのみ思ふ。」と書き、また例えば、「とばかりあるほどに、物しためり。目も見合はせず、思ひ入りてあれば、「などか。世の常のことにこそあれ。いとかうしもあるは、われを頼まぬなめり」などもあへしらひ、……」と書くようにである。そしてこの記事の最後は、「人の心も、いと頼もしげには見えなむありける。」といって閉じられる。ここで父との別れの悲しさを浮き彫りにするためであるかのごとく兼家の愛情は信用しようとはしないのには、いろいろな側面からの考察が必要だと思うが、一つには兼家が道綱母に対して和歌を詠み掛けていないことも大きいと思う。慰められていると実感するためには、兼家からの和歌が必要だったのではないか。

(15) 「解釈大成」の鑑賞・解説欄参照。

(16) 兼家の返歌があるのはこの前後では珍しいが、そのことについては、注(17)参照。

(17) 『蜻蛉日記』には載らない贈答歌が『後拾遺和歌集』巻十四・恋四・822〜824番に載るが、内容から結婚成立の翌年の正月、すなわち2425番の贈答歌と近接する頃の遣り取りだろうと考証されている。(引用は『新編国歌大

観』による。)

をむなのもとにつかはしける 入道撰政

わがこひははるのやまべにつけてしをもえいでてき

みがめにもみえなむ (822)

かへし 大納言道綱母

はるののにつくるおもひのあまたあればいづれをき

みがもゆとかはみん (823)

おなじをむなに 入道撰政

かすがのはなのみなりけりわが身こそとぶひならね

どもえわたりけれ (824)

ここで兼家から贈歌があつて贈答歌が成り立っているのは、今みている期間にあつては例外となる。しかも、兼家が三首目までも返している。そもそもこの贈答歌が『蜻蛉日記』に載らない理由が大きな問題なのだが、同じ年の八月末近くに道綱を出産し、その折りの兼家の態度を「そのほどの心ばへはしも、ねんごろなるやうなりけり。」と記すのと関係あるか。『蜻蛉日記』を読むと、兼家の愛情は記したくない道綱母の執筆態度がうかがえるが、出産前後の兼家の愛情は格別であつたようで、抽象的な一言であるにせよ言及しているのは、別格扱いしていると言える。すると、この贈答歌がなされたのは、ちようど道綱母の妊娠が確認されて兼家にも告げられた頃、乃至はそれから暫く経つての頃と思われることに注意される。当然妊娠発覚頃からも兼家の態度は「ねんご

ろ」であつたはずで、それと兼家が822番歌を贈ってきたことはつながるのではないか。『蜻蛉日記』の24番歌に對して、このあたりでは珍しく兼家が25番歌を返しているのも、道綱母の妊娠を知っていたからかもしれない。要するに、道綱母は妊娠発覚の頃より「ねんごろ」であつた兼家の態度を具体的にまでは記したくないのであり、『後拾遺和歌集』の贈答歌を遣り取りする兼家の態度(自ら贈歌し、三首目までを返す態度)も「ねんごろ」な態度に含められて、『蜻蛉日記』に書き込まれなかつたのではないか。そうだとすると、出産前後頃同様に妊娠発覚頃からの兼家の愛情をも別格扱いしていると想定できる。よつて、兼家から贈歌のあつた贈答歌が一組あつても、この前後は自分から和歌を贈る場合ばかりでもあり、「自己卑下」を書き付けた返歌が切り返しとして緩かつたという忸怩たる思いとは、それ程関係するものではないであろう。

(18) 『王朝女流日記論考』(一九九三年一〇月・至文堂)「第五章 日記文学における和歌(その2)―女からの贈歌―」、並びに「第八章 『蜻蛉日記』の一解釈―「なほもあらじ」考―」参照。引用は、第八章から。

(19) 「兼家の嘘の言い訳を求める道綱母の歌語り享受―道綱母対町の小路の女と恵子女王対好古女―」(『言語文化研究徳島大学総合科学部』第14巻・二〇〇六年二月)。この拙稿を発表後、足立祐子氏「『蜻蛉日記』の

作者と弟長能」(『武庫川国文』第69号・二〇〇七年二月)が出た。道綱母の弟の長能が「伊尹の在世中から一条摂政家に仕え」ていた様相を炙り出し、「作者や長能など、この一家は一条摂政家や花山帝に関係が深かったのである。」(「作者」とは道綱母のこと)と指摘する。道綱母が伊尹をめぐる歌語りを享受していたのではないかという想定にとつて、興味深い指摘である。

(20) 「全集」は、「この「書きつく」は、(中略)兼家に読まれることを期待しながら、ともかくも書いておく、といった趣である。思うに、「あきにあふ」の歌は、明らかに兼家の「をりならで」への答歌として詠まれているけれども、同時に、贈答よりも自分の気持を処理することの方に重きをおいている点がうかがえる。それは、一面この歌が、兼家の歌を飛び越えて、「わが宿の」の独詠と深くつながっていくことを意味するのではないか。」と指摘する(「全集」も同内容)。ちなみに、「全集」は36番歌について、「ことさらに「ひとりごと」と述べているところにむなしさが感じられる。」と評している。36番歌は独詠歌でありながら贈歌としての様相をも、38番歌は返歌でありながら独詠歌としての様相をも帯びていると言えばよいであろうか。とにかく、両歌とも、道綱母の複雑な心境を反映した様相を示している。

(21) 藻塩焼くけぶりの空に立ちぬるはふすべやしつるく

ゆる思ひに(39・隣人)

この歌に関しては、川村裕子氏(角川ソヒア文庫『新版蜻蛉日記Ⅱ(下巻)』解説(二〇〇三年一〇月))に興味深い指摘がある。兼家が道綱母邸からそくさど立ち帰るのに合わせて詠み贈られてきたというこのお節介な歌の不自然さや、この歌が後に何ら展開も発展もしないのに『蜻蛉日記』に載せられている点を問題視し、「この歌は、話の内容ではなく、道綱母の感情がクローズアップされるための道具ではなからうか。(中略)持つて行き場のない怒りが、他人の歌——自分の告白でもなく兼家の言葉でもない——によつて、迫力をもって読む人に伝わっていく。」との想定を示している。自分の歌を兼家につける気力をなくした道綱母には、隣人のお節介の歌が、自分の気持ちを代弁しているように思えて仕方がなかったのではないだろうか。

(22) 拙著『歌語り・歌物語隆盛の頃——伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学——』(二〇〇七年一〇月・和泉書院)「第二部 第一章 『蜻蛉日記』上巻の最初の引歌表現——「いかにして綱代の氷魚にこと問はむ」——」。